２０１１／０２／２０　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

**主　　題：異邦人の救い**
**聖書箇所：ローマ人への手紙　１１章１１－２４節**

　イスラエルは神が備えてくださった救いではなく自分たちの救いを選択しました。神の恵みによる救いではなく、自分の努力による救いを彼らは選択した訳です。その結果、彼らは天から送られた救い主イエス・キリストを受け入れることもなく、かえって彼を十字架で殺すのです。こうして、彼らは神が備えてくださった救い主イエスにつまずいたと、９章また１１章でパウロは教えました。このようなイスラエルの犯した大きな失敗、このような過ちの中にも、理解を超えた神のすばらしい計画が存在していると、パウロはそのように教えるのです。
　このように神に逆らって来たイスラエル、でも、神はその民のためにすばらしい計画を持っておられます。この１１章３３－３４節を見ると**「:33 ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」**と、パウロはこのようなことを最後に教えます。つまり、神のこと、神についてのこと、神が為さっておられること、神のお考えになっていること、そのすべてのことは人の詮索では覚束ないということ、パウロはそのことを言うのです。私たちの理解を超えた方である、私たちが神のしておられるすべてのことを理解することは到底無理である、どれ程知恵を持っていても、神のすべてを理解することはできないと言うのです。神の知恵と知識は私たちの理解の限度を超えているのです。
　また、３４節には**「なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。」**、神のおこころ、神がお考えになっておられること、神が思っておられること、いったい、それらをすべて知ることができる人はだれか？だれもいない、どこにもいない、それは神にしか分からないことであるとパウロは言うのです。ですから、パウロは私たちにこれまで繰り返して、私たちの理解を超えた神の知恵の深さと完璧さを教え続けてくれています。その偉大さを少しでも知った者たちは、この神のすばらしさをただ誉め称えることしかできません。１１：３６に記されているように、**「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」**、まさにそのように「神さま、私たちにはすべてのことが分かりませんが、あなたは神であるから私たちはあなたを称えます。」と、私たちが神の偉大さに圧倒されて行けば行くほど、私たちはこの方に対する畏敬の念を深めて行きます。まさに、パウロはそのように私たちを導いています。あたかも、パウロが私たちに「私たちの神はどんなに凄いか分かるか？どんなに偉大な神を我々は信じることができているのか、分かりますか？私たちの神はどれほど偉大であるか、それを忘れてはいけない。」と問い掛けているようです。
　特に、１１章の学びに入って私たちはそのことを教えられています。今朝も、私たちは１１章１１節から、偉大な私たちの神のその知恵と恵みとを学んで行きます。神がどれ程偉大なお方なのか？

**☆神の偉大さ**
**Ａ．神の知恵　　１１節**
**１．イスラエルのつまずき**
　まず、１１節を見ると、ここには神の知恵が記されています。**「では、尋ねましょう。彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょうか。」**、これはイスラエルのつまずきのことです。私たちがもうすでに見て来たように、彼らは神に対してつまずいた、この救い主に彼らはつまずいた、それを受け入れることをしなかったからです。そのことについて、なぜ、彼らがつまずいたのか、その理由は**「彼らが…倒れるためなのでしょうか。」**とパウロは尋ねます。すなわち、もう彼らには救いの希望が全くない、彼らは神の恵みから永遠に引き離されてしまって、救いに対する希望を完全に失ってしまった、彼らは神に見捨てられたそのような状態に陥ってしまって、救いの希望は絶対にないのかとパウロは問いかけるのです。それに対して**「絶対にそんなことはありません。」**と答えます。つまり、パウロが言いたかったことは、このようにイスラエルが神に対してつまずき、神に逆らっていても、神の計画は未だあり、それは必ず実行されるということです。
**２．つまずきのわけ**
　そして、パウロはその「つまずき」の理由についてこのようなことを教えています。１１節の中ほど、**「かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。」**
**１）異邦人の救い**

パウロは「イスラエルがつまずいたことによって、それが異邦人の救いへとつながっている。」と言うのです。皆さんも、教会の成長、その過程を覚えておられると思います。

ａ）**アンテオケの会堂**：アンテオケという町にパウロとバルナバがいました。ユダヤ人たちと会堂で話し合いをしていたパウロとバルナバは、神のことばに対して心を開かない彼らに対してこのようなことを話しています。使徒１３：４４－４７**「次の安息日には、ほとんど町中の人が、神のことばを聞きに集まって来た。:45 しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしった。:46 そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。:47 なぜなら、主は私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。あなたが地の果てまでも救いをもたらすためである。』」**、福音を聞いていながらそれに反対し口汚くののしった彼らに対して、**「私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。」**とそのように告げました。

ｂ）**コリントの会堂**：コリントの会堂でも同じでした。ユダヤ人たちもパウロの元に集まって来るのですが、彼らはイエスがキリストであるというメッセージを聞いた時にパウロたちに反抗して暴言を吐きました。そこでパウロはこの人々に対して、使徒１８：６**「しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く。」と言った。」**と、そのように記されています。

ｃ）**ローマ番兵付きの家**：また、「使徒の働き」の最後２８章を見ると、パウロはローマにいました。ローマで番兵付きの家に彼がいたことが記されています。２３－２８節**「そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。:24 ある人々は彼の語る事を信じたが、ある人々は信じようとしなかった。:25 こうして、彼らは、お互いの意見が一致せずに帰りかけたので、パウロは一言、次のように言った。「聖霊が預言者イザヤを通してあなたがたの先祖に語られたことは、まさにそのとおりでした。:26 『この民のところに行って、告げよ。あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。:27 この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、その目はつぶっているからである。それは、彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟って、立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』:28 ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう。」**、パウロの元に人々が集まってくる訳です。パウロは彼らに対しても神のすばらしいメッセージを語ります。その中のある人々はそのメッセージを受け入れますが、ある者たちは信じなかったと記されています。

ですから、確かにイスラエルは、この神のメッセージに対して、救い主に対して背を向けました。それを受け入れなかっただけでなく、そのメッセージに反対し、メッセージが語られることさえも彼らは妨げようとしたのです。このようなイスラエルの罪に対して、神の恵みはもう尽きてしまったのか？神は彼らを見捨てて、彼らをあわれむことがないのか？と、そのことに関してパウロは「いいえ、神は彼らのことをしっかり覚えておられる。」と言います。確かに、イスラエルが罪を犯すことによって、福音はイスラエルから異邦人へと広がって行きました。福音のメッセージが異邦人に届いて異邦人が救われるようになりました。この現実を見るなら、神はイスラエルを見捨ててしまわれたかと思うかもしれない。ところが「とんでもない！神はまだイスラエルを愛している。それが証拠に、こうして異邦人が信仰に至るこの出来事も、実は、神がイスラエルを愛している証拠だ。」と言うのです。なぜですか？

**２）イスラエルの救い**

神がこのように異邦人を救うことによってイスラエルにねたみを引き起こそうとしていると、パウロはそのように１１節で教えます。**「それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。」**と。１０：１９にも**「でも、私はこう言いましょう。「はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。」まず、モーセがこう言っています。「わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。」**とあり、すでに見ましたが、実は、異邦人が救われるのはこのイスラエルの人々のためである。彼らがねたみを引き起こして、それによって彼らが救い主の所に立ち帰って行く、それが神が望んでおられることだと、そのように教えるのです。**「ねたみを起こさせる」**とパウロは記しています。そのために神は異邦人が救われたと言います。

イスラエルは自分たちが選民であることをよく知っていました。神から契約や律法、また、数々の祝福をいただいていました。本来なら、そのような祝福をいただいた者として、心砕かれて謙虚に、すべての人々に神の恵みを伝えるはずですが、彼らは自らに与えられた大きな特権をもって自分たちを誇ったのです。そして、彼らは異邦人たちを見下し始めたのです。そのような状態にあって、異邦人が救いに与り、そして、異邦人が神との平和からくる平安を持って生きている様子、彼らが罪赦されることに

よって喜んでいる救いの喜び、また、永遠の希望などの祝福を持って生きているその様子を、イスラエルが聖霊によって見る時に、異邦人が持っている祝福を実は自分たちは持っていないということに気付いて「ねたみ」を起こす、そのためだと言うのです。「自分たちが持っていないものを彼らが持っている。私たちは一生懸命、このように神の教え、命令に忠実に生きようとした。律法の教えを一層懸命守って、その行ないによって自分たちは救われると思ってこれまで生きて来た。宗教に熱心で、神が喜ばれることを一生懸命、忠実にして来た。しかし、私たちがその働き、行ないによって得たものは、彼らが持っているものとは違う。彼らが持っているものを我々は持っていない。彼らが持っているあの平安も、彼らが持っているあの救いの喜びも、彼らが持っている永遠の希望も私たちは持っていない。」と。

そして、その結果、彼らは「どこからそれを手に入れたのですか？なぜ、あなたたちはそれを持っているのですか？」と、神はそのように導こうとしておられると、このような神のご計画をよく知っていたパウロは、１３－１４節を見てください。**「そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。:14 そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです。」**、つまり、神から与えられた使命をよく理解していたパウロは、それゆえに、異邦人に福音を語り続けたのです。でも、彼は同時に知っていました。こうして異邦人が救われることによって、結果的に、自分の愛するイスラエルにすばらしい証が成されて行くと。だから、彼は熱心にこの福音を異邦人に語り続けたと告白するのです。彼がどれ程自分の同国人であるイスラエルを愛していたのかということは、私たちはもう何度も見て来ました。「イスラエルの人々、自分の同胞が救われて欲しい！」と切望しました。そして、彼は分かっていました。異邦人の救いの背後にある神のすばらしいご計画を。もちろん、パウロは異邦人が救われることを望みました。同時に、彼はこのイスラエルの人々が救われることも望んだのです。

異邦人の救いは**「イスラエルにねたみを起こさせるため」**と言いました。でも、考えていただきたいことは、イスラエルの人々がねたみを引き起こすためには、神の祝福が周りの人々に明らかに示されていなければなりません。つまり、人々が見て、この人の内には何か自分の持っていないものがあると思えば、その何かに関心を示します。もし、異邦人が神からいただいた祝福を明らかにしていなければ、神の計画は成就しません。確かに、イスラエルがねたみを覚えて彼らが救いに導かれるとみことばは記していますが、同時に、新約聖書には「私たちは世の光である。地の塩である。」とあり、私たち救われた一人ひとりの異邦人に対しても、キリストのすばらしさを証するという大きな責任が与えられています。そうすると、あなたの周りにいるイエスを知らない人たちがあなたを見て、神に対する渇きを覚えるかどうか、そのことをよく考えて見なければいけません。そう思いませんか？「ねたみ」を起こすためには、彼らが持っていないものを私たち信仰者が持っていることを明らかにするべきです。それが見えないなら、彼らは私たちに対してねたみなど覚えません。つまり、私たちが考えなければいけないことは、私たちの生き様が私たちの周りの人々に神に対する渇きをもたらしているかどうかです。私たちが家庭の中にあって、子どもたちに「お父さんとお母さんが信じているこの神を私も信じたい」と思わせるような渇きをもたらしているかどうかです。夫婦の間においても、夫が、妻が、私の伴侶が信じている神を私も知りたいと思うような渇きをもたらす、その様な歩みをしているかどうかです。なぜなら、私たちが見て来たこと、神が異邦人を救われた理由は、イスラエルにねたみを引き起こさせるため、それは異邦人がキリストによって与えられた祝福を明らかに示しているから、その働きが実現するからです。

信仰者の皆さん、どうですか？ヤコブがこのように言っています。ヤコブの手紙２：１８**「さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」**、今、私たちが見ていることをヤコブ自身がこのように告白しています。２６節**「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。」**、もし、私たちがこの救い主に対する渇きを与えるのではなくて、かえって、未信者が距離を置くような言動を取っているなら、私たちは悔い改めなければいけません。「この人の信じている神なんて私は知りたくもない。この人が崇めている神など私は知りたくもない。」などと、そのようなことがあってはならないのです。

この１１節で、パウロは私たちに神のすばらしい計画を明らかにしてくれました。イスラエルが神を拒んだのです。その結果、救いは異邦人に渡ったのです。ところが、神はそのイスラエルの失敗を用いて、イスラエルにあわれみを示し続けておられる、このような神だと言うのです。実は、私たちもこのような神であるからこの救いに与った訳です。私たちが神に対してして来たことは、常に、この方に逆らうことばかりでした。でも、この方が私たちをあわれんでくださったのです。すばらしい神の知恵を、私たちはそのみわざの中に見ます。

**Ｂ．神の計画　　１２－１５節**

**１．イスラエルの失敗がもたらした祝福**

先ほど１３節と１４節を見ましたが、１２節と１５節の二つの節は非常に関連しています。先ず、パウロはイスラエルの失敗がもたらした祝福について語ります。

**１）失敗**

彼らはどのような失敗をしたのか、三つのことばが出て来ます。

**ａ）彼らの違反（１２節）：**

**ｂ）彼らの失敗（１２節）：**

**ｃ）彼らの捨てられること（１５節）：**

「彼らの違反」、「彼らの失敗」は、救いを拒んだこと、神の救いを受け入れなかったという罪のことです。「彼らの捨てられること」、この「捨てられる」とは「拒否される」ということです。神によって捨てられる、神によって拒否されるのです。なぜなら、彼らの罪が原因だからです。ですから、この三つのみことばのすべてに共通していることは、イスラエルの人々のその罪です。それゆえに、彼らは神によって捨てられてしまった、拒否されてしまったと言うのです。しかし、それは永遠に続くものではないと言います。それはこの後見て行きます。彼らの失敗とともに、彼らの祝福を三つ見てください。

**２）祝福**

**ａ）世界の富（１２節）：**

**ｂ）異邦人の富（１２節）：**

「世界」とは祝福の対象である異邦人を指しています。「富」とは「世界の富」、「異邦人の富」のどちらも「救い」のことです。１１節で見た通り、イスラエルが主を否定、拒むことによって、救いが異邦人に及んだということです。

**ｃ）世界の和解（１５節）**：この「和解」ということばは皆さんよくご存じです。神によって救われた者たちが、神との敵対関係から解放されたということです。生まれながらにみな神に逆らう者、神に敵対する者でしたが、神はそこから私たちを救い出してくださったのです。ローマ５：１０**「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、…」**、また、Ⅱコリント５：１８**「これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。」**、コロサイ１：２０には**「その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。…」**とあります。つまり、「世界の和解」とは神と異邦人が和解すること、救いに与ることです。

このような祝福をいただいたとパウロは言うのです。イスラエルの罪によって福音が世界、異邦人に広がり、そして、人々がこの救いの恵みに与ったと。

驚くべきことは、イスラエルの罪によって、神は仕方なく私たち異邦人をあわれんだのではないということです。神はイスラエルを愛された、でも、イスラエルが神を拒んだ、救い主を拒んだ、その時点で、神はどうしよう、せっかくイスラエルを愛していたのに彼らはわたしを拒んだ、仕方がないから異邦人を愛そうと、そのように為さったのでしょうか？決してそうではないということです。実は、このすべてのことは神のご計画のうちにあったと、聖書は私たちに教えるのです。

神がアブラハムと契約を結んだときのことを覚えておられますか？創世記１２章に記されていることですが、神とアブラハムの契約のときに神はこのように言われています。**「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」**（創世記１２：３）と。このように約束があるのです。神がアブラハムに約束を与えたのです。アブラハムによってすべての民族が祝福されること、つまり、神の祝福はイスラエルだけではないのです。異邦人にも及ぶことが約束されていたのです。そこで、皆さん、確かに、私たちは歴史の中にあって、イスラエルが神を拒んだ、それゆえに、救いが異邦人に広がったことを見ました。しかし、神はそのすべてのことを永遠の昔から定めておられたのです。確かに、私たちは神の知恵が余りにも深すぎてそれを理解することができません。神のご計画のすべてを私たちは理解することはできません。しかし、今教えていることは、確かに、このように福音が私たちのところに届いて来たけれど、このすべてのことは神のご計画のうちにあったということです。

最初に、パウロは１２節から１５節で、イスラエルの失敗がもたらした祝福について語りました。イスラエルの失敗によって、異邦人がこのような救いというすばらしい祝福に与った、すべて神のご計画のうちにあったということです。

**２．イスラエルの完成がもたらす祝福**

**１）彼らの完成（１２節）、**

１２節**「もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上**

**の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。」**、彼らの失敗がこんなにすばらしい祝福をもたらした。それなら、彼らの完成はもっとそれ以上の祝福をもたらすでしょうと、パウロはそのように言うのです。問題はこの**「彼らの完成」**がどういう意味なのかです。これは「充満、満たす」という意味を持っています。実は、このことばは１１章２５節にも出て来ます。**「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時まででであり、」**、この**「完成」**とは「数」のことです。つまり、２５節で言っていることは、**「イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時まで」**、つまり、異邦人の数が満たされるそのときまでと言うのです。別の説明をするなら、「神が選ばれた異邦人の最後の人が救われるそのときまで」ということです。パウロはそのことを２５節で教えているのです。

では、１２節で教えている**「彼らの完成」**とは何のことでしょう？**「彼ら」**とは明らかです。イスラエルのことです。「イスラエルの完成」です。２５節と同じことばを使っているので、ここでパウロが言わんとしたことは「イスラエルの数が満たされるとき」のことです。トーマス・シュレイナーという神学者は「選ばれた異邦人の数が満たされる。そして、今度は、選ばれたイスラエル人の数が満たされる。そのことを教えている。」と言います。ですから、驚くべきことは、今、私たちはこうしてこの時代に生きています。そして、神は選ばれた人々を救っておられる。でも、最後の人がいるのです。「この人が救われたら終わり！」というときが来るのです。異邦人の最後の人が救われると、今度は、神はイスラエル人に対して働きを始められます。そして、イスラエルの最後の人が救われた時に、また、神は別の働きをされるのです。そのことについては後でお話します。

先ず、イスラエルの完成です。選ばれた最後の人が救われるということです。

**２）彼らの受け入れられること　　１５節**

１５節に**「彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることでなくて何でしょう。」**とあります。その前を見ると**「彼らの捨てられることが」**と書かれています。**「捨てられること…受け入れられること」**、これは明らかに神との関係のことです。神を拒んだゆえに、神によって捨てられてしまった彼らが、再び、神によって受け入れられるということです。選ばれたイスラエルが悔い改める時にそのようなことが起こるのです。このことによって、異邦人は大きな祝福を経験します。それは「死者の中から生き返ること」です。１５節に**「死者の中から生き返ることでなくて何でしょう。」**とあります。パウロは何のことを言っているのでしょう？二つの大きな説があります。

**（１）霊的いのちが新たにされること**：放蕩息子のたとえを思い出してください。弟息子が父親のもとから離れて放蕩に走ります。でも、その息子が**「私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。」**（ルカ１５：１８）と言って悔い改めて帰って来ます。そのときに父は**「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』」**（１５：２４）と言っています。ですから、そういう意味で「霊的いのちが新たにされる」という意味ではないかという説です。

**（２）肉体のよみがえり**：しかし、どうもこの１５節で言っている**「死者の中から生き返る」**というのは、そういう霊的なことではなく、「肉体のよみがえり」のように思えて仕方がないのです。なぜなら、このことについてダクラス・モーという神学者がこのように言っているからです。「この『死者の中から』という表現は、新約聖書に４７回出て来るうちの４６回が『からだのよみがえり』に関して使われている表現だ。」と。ローマ書６章１３節以外です。４７回中４６回が「死者の中から生き返る」は「からだのよみがえり」を指しているのです。

確かに、皆さんもご存じのように、世の終わりに起こることの一つは「よみがえり」です。今、この地上に生きている私たちは、イエス・キリストが私たちを迎えに来てくださった時、空中でイエスとお会いする時に、すでに死んでいる人は新しいからだをいただき、私たちも栄光のからだをいただきます。栄光のからだをもって空中でキリストにお会いするのです。そして、その後の７年間の患難時代の後、イエス・キリストは地上に帰って来られます。そのときに何が起こるのでしょう？

**◎地上再臨のときの「よみがえり」**

**（ａ）旧約時代のすべての聖徒たちの復活**：モーセやアブラハム、そのような旧約の聖徒たち、神の救いに与っている者たちがよみがえるのは、空中携挙の時ではありません。地上再臨の時によみがえるのです。ダニエル書１２章１－２節に**「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。:2 地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。」**とあるように、**「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。」**のです。これは旧約の聖徒たちのよみがえりを預言しているのです。もちろん、

イザヤ書でも、イザヤが２６章でそのことを預言しています。２６：１９－２１**「あなたの死人は生き返り、私のなきがらはよみがえります。さめよ、喜び歌え。ちりに住む者よ。あなたの露は光の露。地は死者の霊を生き返らせます。:20 さあ、わが民よ。あなたの部屋にはいり、うしろの戸を閉じよ。憤りの過ぎるまで、ほんのしばらく、身を隠せ。:21 見よ。主はご自分の住まいから出て来て、地に住む者の罪を罰せられるからだ。地はその上に流された血を現わし、その上で殺された者たちを、もう、おおうことをしない。」**、同じように、ここでも死人のよみがえり、旧約の聖徒たちのよみがえりのことを記しています。

ですから、確かに、世の終わりにこのように、旧約のすべての聖徒たちがよみがえることが約束されています。

**（ｂ）患難時代に殉教した聖徒たちの復活**：また、患難時代において殉教した聖徒たちがよみがえることが記されています。黙示録２０：４－６**「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。:5 そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。:6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」**とこのように記されています。患難時代に多くの信仰者が生まれます。特に、後半の３年半には１４万４千人の人々が神によって選ばれ、その人たちが出て行ってキリストの福音を伝え、多くの人々が救いに導かれることが記されています。しかし、多くの者たちが信仰ゆえに殉教の死を遂げて行くのです。その人たちがよみがえって来るのです。それがいつか？この最後の時です。イエス・キリストが戻って来られた時にそのようなことが起こるのです。

ですから、今日、私たちがこのテキストを見る時に、死者の中から生き返ること、恐らく、パウロはそのことを言っているのでしょう。なぜなら、時系列で言うなら、まず、選ばれていた最後のユダヤ人が救われます。そうすると、キリストが戻って来られます。キリストが戻って来られることによって、よみがえりが起ります。旧約の聖徒たちがよみがえります。そして、患難時代に亡くなった殉教者たちのよみがえりが起こります。そして、その後、千年王国が始まるのです。そのような約束が神によって為されているのです。

ですから、パウロがここで言う、異邦人たちが経験する、この世界が経験するすばらしい祝福、イスラエルの完成を通して世界が経験する祝福とは、私たちが千年王国へと導かれて行く祝福のことです。なぜなら、千年王国ではご存じのように、私たちを苦しめ惑わしてきたサタンは閉じ込められます。惑わしの働きはいっさいできなくなります。この天と地は新しくされます。そして、そこにイエス・キリストが王国を築かれ、王として治められます。イスラエルは、そして、私たちはこの方に仕えるのです。そのような約束を神が私たちに与えてくださったのです。イスラエルが完成する時に、選ばれたイスラエルの最後の人が救われることによって、このような祝福が世界に与えられると。

皆さん、今日の私たちのまとめです。神が為さっておられること、私たちはそのすべてを知ることはできません。しかし、少なくとも、私たちが神が何をしておられるのかをこのように学ぶことによって、私たちは確実にこの神に対する畏敬の念を抱きます。私たちにはこのようなことは計画できないからです。イスラエルの罪、それを通して、神は私たち異邦人にすばらしい救いをくださった。でも、それを通して、神はイスラエルにまだ救いの手を差し伸べておられます。そして、異邦人である私たちの最後の人が救われたなら、神はイスラエルに対しての働きをされます。そして、選ばれたイスラエルの最後の人が救われたら、約束通り、キリストがこの地上に私たちを伴って帰って来られます。

神の計画は必ず成るのです。神のおっしゃったことは必ずその通りになるのです。そうすると、患難時代を通らないと信じている私たちは、その前に起こる空中携挙を待望しながら今日生きているのです。それを考えるだけで私たちの生き方が少し変わると思いませんか？どうも、私たちの問題はこのようなことは知識としてどこかに残っているけれども、イエスにお会いするのはもっと先のことであると思ってしまっていることです。イエスが帰って来られると言っても、それは１０年も２０年も３０年も先のことだろう…と。みことばを見るなら、それは今日かもしれないのです。問題は、明日をどう生きるかという計画を立てるより、今日をどのように生きるかを考えて、今日を正しく生きることです。

信仰者の皆さん、今日イエスに会う備えをして、今日イエスにお会いしてもいいように備えをして、今日を一生懸命生きることです。明日が与えられたらまたそのように生きるのです。それが今この地上に生かされている私たち異邦人であるクリスチャンが、しっかりと覚えなければいけないことであり、そのように生きていかなければいけないことです。今日を大切に生きて、今日、神に喜んでいただくように生きて、今日、神の栄光のためにすべてのことを為して行くことです。明日が与えられたなら、そ

の日もそのように為して行くのです。そのようにして私たちはキリストにいつお会いしてもいいように備えをするのです。
　どうぞ、この先に神が約束してくださっていることを覚えてください。私たちの神は言われたことを確実に守られる方です。神の約束は必ず成されることを確信しながら、今日、私たち一人ひとりが神の前にしなければいけないことを選択して、そのように生きて行くことです。どうぞ、今日を無駄にしないように！どうぞ、今日、イエスに会う備えをもって生きてください。

《考えましょう》
１．イスラエルにねたみを引き起こすために、神が私たち信仰者に望んでおられることは何でしょう？
２．その神が望んでおられることを、あなたが実践するために必要なことを挙げてください。
３．「イスラエルの完成」とは何のことですか?
４．その時もたらされる祝福を挙げてください。